

漢法苞徳塾資料	No. 268
区分	治療論・補瀉
タイトル	補瀉の実技をめぐる
著者	八木素萌
作成日	

◎はじめに

“シンポジストになるように”と連絡があったのは、抄録原稿の締め切り1週間前であった。シンポジストの候補者の一人に挙がっていたが、あの理事会の内容の俣“シンポジウム”が組まれるとは思っていなかったので大いに慌てた。編集部の数日の締め切り延期をお願いし、司会者に問い合わせ急遽この抄録を書いた。

◎“鍼は術だよ、心だよ、芸だよ”と言われた師の言葉

私の実技は、何と言っても師匠である橋本素岳師に決定的に多くのものを、頂いている。亡くなる直前まで指針の練習をされていた。亡くなる前日には、先生のお体をさすっていられたご子息が、看病疲れの為ベッドサイドでうつらうつらされていると、橋本先生が揉んであげていたのである。

柳谷素霊師の完熟期の内弟子として柳谷先生から手伝えで技術を教えを受け、さらに御自分の50年にも渡るキャリアが加わって仕上げた技術には、私はまだ遠く及ばないが、師の名を辱めないように務めたいものと念願している。シンポジストを務めることになった今、師の言葉がシミジミ思い起こされる。

「何としても患者さんが楽になるようにしよう」と言う治療家の一心不乱な姿が患者の心に響いて、その回復力・抗病力・抵抗力を励ますのだよ」

「こういう心がないと技術が上手なようでも効果が意外にも落ちるものだよ」

「私等の鍼灸治療は術だよ・芸だよ、倦まずたゆまず務めないよね」何度も教えられた。

「一寸手を持って来なさい、この感じが判かるかね、これがツボだよ」

「こう言うのがツボに鍼が当たっている感じだよ」

「“気が来ている”時はこういう感じだよ」

「5穴を探って1穴を取るんだよ、真穴を取ればツボ数は絞られて無駄が無くなるよ」

「鍼治療は身体に異物を入れるのだよ、だから無理に強引に刺し込んではいけないよ」

「ちゃんと挨拶をしてから鍼を入れなさいよ、前揉撫が挨拶だよ」

「優しく5度弾入を試みて刺さない所は、生体が拒んでいるツボだから、刺してはならないんだよ」

「深い病はね、浅い所から順番に剥がして行くんだよ」

「前揉撫のやり方でツボは現われたり隠れたりするものだよ、だからこうしなさいよ」

等の言葉や、いとも無造作に見える橋本先生の“線香刺し”が、思い起こされるのである。まさに“入神の技”と思う。その橋本先生が「鍼はどうしても瀉になる事が多くなるものだよ、鍼の補は本当に難しいものだね、だから柳谷先生は重要な所では抜鍼のあとで1壮灸されることが多かったよ」と良く言っておられた言葉などである。

◎「補瀉の選択」の問題

最近、鍼灸治療の補瀉について考えるうえの興味深い経験をした。それは夜半に電話相談をされた例である。これを紹介する所から論を進めたい。

鍼灸学校での授業中にフラついて気分が悪いので、その学生は授業担当の先生から治療してもらった話に関したものである。「脈診で“肝実肺虚”と診断され“69難の治療取穴”の治療であったが、その夜“心臓が踊って怖い”ので、対策を知りたい」と言う。さらに聞くと「診断は六部定位脈法のみ・37.3度の微熱・脈は微に浮虚で数気味・頭痛や体痛は無い・二便に気になる点は無い・やや胃を意識している・足がだるい」由である。昼間受けた治療はどうも効果が薄かったようである。私は「湿熱に風がからんだ中暑の病」の「胃痞もしくは結胸」が主訴の本当の理由であろうと推測して、風・湿・暑などの邪を瀉したのち肺を調べて置くように指示した。そのまま治癒した事が6日後に当人から報告された。この推測と治療指示の背景には『49難』と『温病学』の中暑論がある。この例には、病因判断・病証解析・虚実補瀉の判断・配経、配穴論など、在来の経絡治療の標準的方式とされて来たものについて考えさせる面があると思う。

「補瀉の選択」の問題

「3年生のSですが、先生、心臓が踊って怖いんです。どうしたら宜しいんでしょう？」と寝入りばなの電話で起こされた。

(八木)「どうしました？」

(学生)「今日学校でフラフラして気分が悪かったので、授業の先生に治療して頂いたんです。少し良いようでしたが、今度は心臓が…」

(八木)「どういう診断と治療でした？」

(学生)「脈を診て“肝実肺虚”と言う事で治療されました」

(八木)「脈診は六部定位脈法ですか」

(学生)「はい」

(八木)「69難で取穴しましたか」

(学生)「そうでした」。

7月13日のことである。

(八木)「熱は？」

(学生)「37.3℃です、微熱です。やや浮脈と言う所です」

(八木)「頭痛は？」

(学生)「ありません」

(八木)「胃の調子や、2便の様子は？」

(学生)「そう言えば胃が少し」

(八木)「他には」

(学生)「特には…」

(八木)「近くにいないから、診察も治療も出来ない、自分で三里に丁寧に刺して下さい。

心配していますからその結果を連絡して下さい。10時位までは寝ないでいましょう」

10時近くなってから電話が来た。

(学生)「大分良いようです」

(八木)「まだ不安が残っているのかね？」

(学生)「はい、やはり少し」

(八木)「では風市と陽輔を瀉して商丘には平補平瀉して置きなさい、
何なら、さらに経渠と合谷に刺し、風府・風池も瀉しておけば…！
そんなところでいいでしょう。」

それっきり何の音沙汰もない。私の出校日の19日に顔を見たので

(八木)「どうしたんです、心配してたんだから結果位は連絡して来るもんだよ」

(学生)「すいません、あのまま治ってしまったようで、連絡しなければと思いながら…
つつい…、疲れやすくなっているようですから、養生に心掛けています。
先生少し説明して頂けませんか？」

(八木)「六部定位脈診の他の問診・切診などはなさいましたか」

(学生)「いえ、脈診だけです」

(八木)「先生が脈診に長けていられたのでしょう。それに多分時間がなかったのでしょう。
病証の解析をされないまま脈診に頼られて治療されたのでしょう」
「多分病邪の除き方が足りなかったのではないかと思います」
「49難には病因が木＝風であれば、脈にも木＝肝の脈が現われ、
病証にも木＝肝の症候も現われると書かれています」
「この病候は、季節柄を思うと、中暑の痰飲による結胸か胃痞だろうと見たんです」
「今の季節は湿熱の邪が中心です、これに風がからんだのでしょう」
「六部定位比較脈では病因の風も“肝実の脈”になりますからね」
「六部定位脈診で証を決定して治療する場合の問題性と69難に頼りすぎた問題性が
表面化したと言えるように思われます」
「私は病証の解析でツボと補瀉を決めました」

(学生)「瀉が多いですね」

(八木)「それは君が2年生の時に講義して、補瀉選択の根拠にないように印刷物を渡して
あります」

この表は次の諸点を一覧表にして簡単な解説をしたものである。

◎補瀉選択の基準となる論は？

『素問』通評虛実論第 28 は「邪氣盛則実・精氣奪則虚」とし『靈樞』根結第 5 では「形氣之逆順奈何」と設問して「形氣不足・病氣有余・是邪勝也・急瀉之」「形氣有余・病氣不足・急補之」「形氣有余・病氣有余・此陰陽俱有余也・急瀉其邪・調其虚実」「形氣不足・病氣不足・此陰陽氣俱不足也・不可刺之」等と述べている。元・汪機『鍼灸問対』の「卷上・或曰：形氣、病氣、何以別之」は臨床に運用しやすいよう注解している。この記述を『難経』48 難の中の「病の虚実」に関する記述と重ねあわせて勘案し、これらに 81 難の「補瀉の決定は脈によらず病自体の虚実によるべきである」と言う指示と、私が第 15 回日本経絡学会学術大会に報告した『難経の補瀉論』を重ね合わせると、臨床的な虚実判断論と補瀉配穴論および手技選択論が立体的に統合される。これが私の臨床的指針となっている論である。

『難経』48 難

「…病ノ虚実トハ、出ズル者ヲ虚ト為シ、入ル者ヲ実ト為シ、言ウハ虚ト為シ、言ワザルハ実ト為シ、緩ヤカナルハ虚ト為シ、急ナルハ実ト為ス…」

この『難経』48 難の記述は、『素問』刺志論第 53 の中の「夫レ実ハ氣入ルナリ、虚ハ氣出ズルナリ」の記述と、ここへの「細字双行」註の「入ルハ陽ト為シ出ズルハ陰ト為ス、陰ハ内ヨリ生ズ、故ニ出ズル、陽ハ外ニ生ズ、故ニ入ル」と言う記述、また、「…氣実スルモノハ熱ナリ、氣虚セル者ハ寒ナリ…」の記述と、これへの「双行註」の「…陽盛ンニシテ陰ヲ内拒ス、故ニ熱ス、陰盛ンニシテ陽ハ外ニ微カナリ、故ニ寒ユ…」なる記述と、これらに非常に近いのが判かる。

◎臨床的な補瀉

1. 配穴による補瀉

これには直裁なもの・迂回的または間接的なものがある。

2. 手技の補瀉

『靈樞』九鍼十二原第 1 にある補・瀉・泄・除の区分は、手技を大分類する拠り所にするのが良いと思われる。例えば「現代 17 手技」には補的なもの瀉的なもの両方に跨がるもの等がある。また手技論の出発とも言える『素問』『靈樞』『難経』などの実技を記述する部分は絶えず研究されなければならない。手技の種類も程度もほとんど無限であると言えるのでは無いだろうか？

3. 用具別の補瀉

用具別にそれぞれの手技があり、補瀉がある。専ら瀉的なもの・双方に運用できるもの・等がある。

4. 補瀉の臨床的運用は

上の3要素を統合して行なわれ、『難経』80難の「…左手見気来至乃内鍼・鍼入見気尽乃出鍼…」を重んじ、病邪の排除や減衰に注意する。精気の話は「呼吸」「汗」「心拍」「眼光」「ノドの違和感」「動作」に細心に観察し過剰治療を避ける。

5. 臨床的に補瀉を認識するには

『素問』通評虚実論第28の「邪気盛則実・精気奪則虚」と『難経』37難の「…夫気之所行也・如水之流・不得息也…其不覆溢・人氣内温于臟腑・外濡于腠理」の運用で認識する。

6. 臨床に運用している鍼具など

毫鍼を主に運用したが、必要と判断した場合には、員鍼や太鍼・長鍼その他は勿論、打鍼や燔鍼なども運用して治療した。毫鍼と小野流円鍔鍼は、金銀をセットに運用する場合もあった。昨年の初め頃に1983年以来試作を重ねてきた「汎用金セット太鍼」が最終的に完成し、その運用手技論も完成してからは、臨床の大部分はこの鍼を用いている。

7. 配経・配穴による補瀉

順逆の補瀉は4通りある。母子関係・相剋関係・流注に関連するもの・穴の格別の組み合わせや独特の性質を利用するもの・剛柔関係・運氣関係・五問十変の関係・そのた実に多くの経脈の性質や穴性を運用している例が記録されているので、これらに注意を払って単純なパターン化に陥らないように戒心しながら治療に望んでいる。

◎配穴の補瀉

『難経』の配穴論には、

1. 『69難』と『79難』に述べられている「迎隨の補瀉」
2. 『49難』と『69難』などに記述されている「正経自病」の治療に関する論
3. 『70難』『72難』『74難』の記述にある「正気の所在」「病因の所在」「季節に応じる所」を取る原理
4. 『75難』『81難』の「金木こもごも相いに平にす」と例示し『64難』『67難』に言うような「剛柔の運用」
5. 『73難』『77難』に見える代行運用や予防的措置としての運用
6. 『62難』の原穴論『67難』の腧募穴論・『68難』の五俞穴・五行穴の主治症論・『44難』の七衝門論・『45難』の「八会穴」論・『31難』に見える、三焦の主治穴論・などの格別の穴性を把握運用している系譜のもの
7. 『28難』『29難』の奇経の治療論

などのように、数種類の異なった系譜が見られる。これらの他、『50 難』の「五邪論」の記述や『56 難』などには配穴論の重要なヒントが隠されている可能性があるのではないかと思われる。

◎手技の補瀉

原理的な理解が重要と思うが、その点『素問』鍼解第 54 の「…虚ヲ刺ストキハ之ヲ実セシムトハ鍼下熱スルナリ、気実ツスレバ乃ワチ熱ツスルナリ。満ナレバ之ヲ泄ラストハ鍼下寒ユルナリ、気虚スレバ乃ワチ寒ユルナリ。菀陳ナレバ之ヲ除クトハ、悪血ヲ出ダスナリ。邪勝テバ之ヲ虚セシムル者ハ出鍼ニ按ズルコトナカレ。徐ニシテ疾キトキハ実ツストハ、徐ヤカニ出鍼シテ疾ヤカニ之ヲ按ジ、疾ヤカニシテ徐ヤカナレバ虚ストハ、疾ヤカニ出鍼シテ徐ヤカニ之ヲ按ズ。…」としている記述に、補瀉手技の原理的なものがあると思われる。『難経』の場合を見ると

『靈枢』官鍼第 7 の〈十二刺〉

『靈枢』邪氣蔵府病形第 4 の〈六変に应ずる刺法〉

『靈枢』官鍼第 7 の〈五臓に应ずる刺法〉〈九変に应ずる刺法〉

『靈枢』小鍼解第 3、『素問』調経論第 62 などのほか、基本的な病証として記述されている所にはそれに応じた刺法が記述されている。

◎手技の補瀉

原理的な理解が重要と思うが、その点『素問』鍼解第 54 の

「…虚ヲ刺ストキハ之ヲ実セシムトハ鍼下熱スルナリ、気実ツスレバ乃ワチ熱ツスルナリ。満ナレバ之ヲ泄ラストハ鍼下寒ユルナリ、気虚スレバ乃ワチ寒ユルナリ。菀陳ナレバ之ヲ除クトハ、悪血ヲ出ダスナリ。邪勝テバ之ヲ虚セシムル者ハ出鍼ニ按ズルコトナカレ。徐ニシテ疾キトキハ実ツストハ、徐ヤカニ出鍼シテ疾ヤカニ之ヲ按ジ、疾ヤカニシテ徐ヤカナレバ虚ストハ、疾ヤカニ出鍼シテ徐ヤカニ之ヲ按ズ。…」

また、『素問』長刺節論第 55 に

「…皮ハ道ナリ…」この「双行註」の「皮ハ鍼ノ道…」

また、『素問』鍼解第 54 の

「…虚ヲ刺シテ之レヲ実スルハ鍼下熱スナリ、気実スレバ乃ハチ熱スナリ。満ナレバ之レヲ泄ラストハ、鍼下寒ユルナリ、気虚スレバ寒ユルナリ。菀陳ナルトキハ之レヲ除クトハ、悪血ヲ出ダスナリ。邪勝テバ之レヲ虚セシムルハ、鍼ヲ出ダシテ按ズルコトナカレ。徐ニシテ疾クスレバ実ストハ、徐ヤカニ出鍼シテ疾ヤカニ之レヲ按ズルナリ。疾クシテ徐ニスレバ虚ストハ、疾ヤカニ出鍼シテ徐ヤカニ之レヲ按ズルナリ。…」

これへの「双行註」に

「菀積也陳久也・除去也・言絡脈之中血積而久者鍼刺而除去之也」

としている記述などに、補瀉手技の原理的なものがあると思われる。

『難経』の場合を見ると「… …」〈 難〉・「… …」〈 難〉・「… …」〈 難〉・「……………」

また手技論の出発点としては

「九鍼刺法論」

「五臓に应ずる刺法」

「九変に应ずる刺法」

「六変に应ずる刺法」

「十二経に应ずる刺法」

その他重要病証別に刺法が述べられている。